

プロ合唱団、率い55年

◇東京芸大声楽科の仲間と創立、新作にも尽力◇

田中 信昭



指揮をとる筆者

大阪から上京し、入学した芸大でも、学生で合唱のアンサンブルを組織した。やがて全国を演奏旅行するまでになり、私は「これから本気で合唱を仕事にしないか？」と仲間提案した。皆がこれについて決心してくれたのは、卒業式の間際だった。

♪ ♪ ♯

多くの作曲家と共に

作曲家との思い出は数知れない。先述の武満さんには、共に中国に出かけた時、散歩しながら「日本民謡を合唱にしてみませんか？」とお願ひしたのがきっかけだった。5分ほど黙り込んだ武満さんは「古謡（を使った合唱曲）ならいいよ」。それで誕生したのが「さくら」だ。

その演奏に気をよくし

柴田南雄さんは、全国を歩き回って伝統芸能を調べ、音楽を採譜した作曲家だ。でもそれをもとに作った合唱曲を、舞台上で直立、整列した男女が歌うのでは伝統芸能の本来の姿とかけ離れてしまう。

そこで柴田さんは「シブアターピース」と銘打って、合唱団が歌いながらステージや客席を歩いたり、伝統的な衣装を着たり、歌の最中に子供がマリつきをしたりと、演出の付いた作品を作るようになった。

創立55周年などを記念した4月22日の特別演奏会（東京・第一生命ホール）では、柴田さんの「萬歳流し」を歌う予定だ。秋田県横手市に伝わる伝統芸能をもとにしたもので、地元にはもう継承者がいない。私たちは、合

唱で伝統を伝承しているともいえる。

ほかにも問宮芳生さん、三善晃さん、林光さん、池辺晋一郎さん、西村朗さん、野平一郎さんといったベテランから若手まで、日本の作曲家とは常にお付き合いしている。たくさん書いてもらって、歌って、聴いてもらって、楽譜を残す。それを繰り返すことにより、少しずつ日本の音楽文化が成長していくのではないか。

前の音楽監督の岩城さんも新作に積極的だった。2006年、岩城さんが生前の最後に指揮したのは、私たちの合唱団だった。

社会や人生にも通じる合唱は「心のハーモニ

ー」だといわれるが、長年やってきて、そうではないと感じる。周囲と心や声を合わせるだけでは足りない。自分の歌が周囲にどのような影響を与え、どう歌えば周囲も自分もより高まるかを一人一人が考え、積極的に歌い合っこそ、いい音楽になる。

合唱は社会や人生にも通じるのではないかと思っている。満員電車に乗ると苦しいが、皆がいるからこそ、安い運賃で移動できるのだ、と私は考える。

隣人がいるから、合唱ができる。現在36人の東京混声合唱団の仲間と日々、こころしたことを学んでいる。（たなか・のぶあき＝東京混声合唱団音楽監督）